

『閩外春秋』と講史

氏 岡 真 士

一 郭威と『閩外春秋』

郭威と言えは、幼くして親を亡くす不遇をはねかえして、皇帝にまで登りつめた人物である（五代後周の太祖、在位九五―九五四）。そんな彼の若いころの愛読書は『閩外春秋』であった。これについて『旧五代史』卷一百一十の本紀には

嘗て昭義の李瓊を省みるに、瓊、方に『閩外春秋』を読む。即ち取りて之を視、曰く、兵を論ずる也、兄よ其れ我に教えよ”即ち之に授ければ、深く義理に通ず。

とあり、『新五代史』卷十一の本紀にも

好く『閩外春秋』を讀み、略ぼ兵法を知る。

とあり、さらに『五代史平話』の『周史平話』卷上にまで

毎夜『閩外春秋』・『太公兵法』を誦誦す。

とある。

このエピソードは、中国小説史の一資料となるかも知れない。本稿ではその可能性を検討したい。

二 『閩外春秋』の流伝

『閩外春秋』は、いまの引用部分から見れば兵法書のようなのだが、

具体的にはどんな内容なのであろうか。

書誌を一瞥すると、『新唐書』藝文志は卷五十八の雜史類に

李筌『閩外春秋』十卷

と記し、『宋史』藝文志は卷二百三の別史類に

李筌『閩外春秋』十卷

と記し、また卷二百七の兵書類にも

李筌『太白陰経』十卷

『占五行星度吉凶訣』一卷

注『孫子』一卷

『閩外春秋』十卷

と重複して記している。これらの記録から作者は李筌であること、また本来は歴史書として認識されていたことが窺える。より詳しい記述として、『中興館閣書目』（『玉海』卷二百四十一所引）には

『閩外春秋』十卷。李筌、撰す。周武王より起り、唐の武徳

に至る、凡そ八代、明君・良將、用兵の得失を録し、事を以て

繫年し、左邱明に擬して（而）之が為に褒貶す。

とあり、『通志』藝文略は卷六十八の兵書の項に

『閩外春秋』十卷。唐の李筌、撰す。周より起り唐に至る、

八代の將帥のこと。

と記す。また『直齋書錄解題』兵書類には

『閩外春秋』十卷。唐の少室山の布衣、李筌、撰す。周武王の

殷に勝つより起り、唐太宗の竇建徳を擒らうるに止む。明君・良將、戰爭・攻取之事なり。天寶二年、之を上る。

とあり、「文献通考」経籍考もこれを襲う（卷二百二十一）。天寶二年は七四三年。なお「郡齋讀書志」に「關外春秋」は見えず、「遂初堂書目」は兵書類に「唐李筌「關外春秋」」とのみ記す。

これらによれば、「關外春秋」は殷末から唐初にかけての軍事關係の史実を「左伝」に倣って記したものと予想される。ただしこうした記述は、後述するように基づくところがある。

ところで時代を下ると、李筌の「關外春秋」に関する記録は見えなくなる。もともと、「明史」卷九十八は兵書類に「尹商「關外春秋」三十二卷」と記すが、作者名も巻数も異なるし、やはりその現存を確認できない。

幸い李筌の「關外春秋」は敦煌文書として、進書表と巻第一から巻第二の中途にかけてがP二六六八に、またP二五〇一には巻第四の中途から巻第五の末尾までが保存されている。そして王重民「敦煌古籍叙録」の史部に解題があり、李筌の履歴を考察する他、進書表の全文も翻字されている。まずはその進書表を、P二六六八を確認したうえで、少しずつ区切って紹介しよう。

臣筌言す。「關外春秋」は（者）、將軍の關外之事を記す也。

關はしきる・しきみと訓じるように、入り口で内外を区切る横木であり、關外とは朝廷の外を指す。「史記」馮唐列伝の「關以内者、寡人制之。關以外者、將軍制之」あたりを出典とするのが筋だろうが、「易」の「師」の正義に「關外之事、將軍所戰、臨事制宜、不必皆依君命」とあるのも、次節の典拠に照らして注目される。

師、貞しければ丈人にして、国之備え有り。弧矢の利、用いて天下之威とす。涿鹿・阪泉、先（王）の冀み行なう所也。

「師貞丈人」は「易」の「師」の言葉で、丈人とは王者の謂いである。また「繫辭伝」の下に「弧矢之利、以威天下」とある。涿鹿・阪泉は黄帝が蚩尤・炎帝と戦った場所。

伏して惟う、開元天寶聖文武皇帝陛下、龍徳は天之明に在り、以て干戚を舞うを正し、蒲車を馳す。

開元なになに皇帝とは、玄宗に対し天寶元年（七四二）に奉られた尊号である。龍徳うんぬんも「易」の「乾」を踏まえる。蒲車を馳すとは開元十三年（七二五）の封禪を指すと共に、遺賢を招くに熱心という意味合いで次節につなげる働きもあるう。

臣や（也）書生にして、堯日を抱くを喜び、蒙吝を揆らず、輒ち祖述する有りて、一家之書を成し、擘餅之才を以て、貞明之化に答う。

擘餅は「左伝」（昭公七年夏）の言葉だが、貞明はやはり「易」の「繫辭伝」下に見える。

周の十また（有）三年、武王の殷に勝つより起り、大唐の武徳四年、太宗文武聖皇帝の竇建徳を擒らうるに（于）終わる。凡そ一千七百四十載、真・偽の四十九国より、歴く明君・良將、戰爭・攻取を選び、師に在りて中して吉なる者は、悉く其の美を書す焉。皆な史を約し以て義を成し、必ず年を表し以て事に首とし、善を褒め悪を貶しむるは左丘明に（於）擬し、号して「關外春秋」と曰う。八代を綜べ以て十卷と為し、君臣之礼、（軍旅）之事、備われり矣。

先ほど見た宋代の書誌は、ここに紹介された「關外春秋」の内容から適宜要約していることがわかる。なお「在師中吉」は例によって「易」の「師」の言葉。

介者、之を得れば、申胥之忠、韓・白之謀、繼踵す可き也。天

の時・地の利、敢えて輒ち書く無きも、人謀權変、秋毫も必ず載す。伏して愧ず、芹・豕を王庭に（于）揚ぐるを。臣筌、誠に惶れ誠に恐る、頓首頓首、死罪死罪、謹みて言す。天寶二年六月十三日、少室山の布衣、臣李筌上表す。

『直齋書錄解題』が「天寶二年、之を上る」と言うのも、ここに基づくであろう。申胥は申包胥、韓・白は韓信と白起。天の時という言葉も「易」の「乾」に見えるが、続いて地の利と言うから、むしろ「孟子」の公孫丑下を典故とすべきか。

勅。卿の用意は精通にして、善く著述を能くし、千載之事を綜べ、一家之言を成す。兵を論ずる之要、此れに（於）尚うる莫し。再三詳覽し、冷だ嘉ぶ可し焉。仍りて史館に付す。八月十一日、内品官の袁思芸、宣す。

これは進書表への玄宗皇帝の返事であり、勅を宣した袁思芸とは、天寶年間に威を振るつた宦官である。

この進書表の内容は、前述のように宋代の書誌も依拠しているから、ひとまず信頼して良からう。しかし著者の李筌について、これだけではよくわからない。節を改めて、この問題を考えよう。

三 李筌の史実

李筌の生涯については、信頼できる資料が少ない。

彼について初めて考証したのは、『四庫提要』であろう。「太白陰経」の項（子部兵家類）で、著者たる李筌について「里籍は未だ詳らかにせず」とした上で、『集仙伝』の「仕えて荆南節度副使・仙州刺史に至る」云々という部分と、『神仙感遇伝』の

筌は將略有り、「太白陰符」十巻を作る。山に入り道を訪ね、終わる所を知らず

という部分を紹介している。

羅振玉（敦煌古籍叙録）所引）はこれを踏まえ、さらに「太白陰経」に付された李筌の自序と進書表とに着目した。前者は唐永泰四年（七六八？）秋、河東節度使都虞侯、臣李筌撰すと結ばれ、後者は

乾元二年（七五九）四月二十八日、正議大夫、持節幽州軍州事

幽州刺史、并本州防禦使、上柱国、臣李筌上表す

で終わっている。ところが永泰の年号は、実際は二年までで大曆に改元された。また肩書も「集仙伝」のそれと噛み合わない。本文も拙いものだ。こう言つて結局は信用していない。一方で「直齋書錄解題」が「關外春秋」について、唐、少室山布衣、李筌撰」と記すのは、巻五の冒頭（P二五〇一）に

少室山布衣、臣李筌上る

とある点に一致するから、李筌は一生無官だったかも知れないなどと述べている。なお羅振玉はP二六六八を見られなかった。

余嘉錫（太白陰経八卷）、『四庫提要弁証』中華書局、一九八〇年）は、羅振玉の説も参照しながら、『四庫提要』の記述に再検討を加えている。まずそこに引かれる「集仙伝」と「神仙感遇伝」は、それぞれ「太平広記」巻六十三と巻十四に基づくと断じたうえで、『雲笈七籤』所収の「神仙感遇伝」の場合は

開元中（七一三―七四二）、江陵節度副使・御史中丞と爲る

という一文が含まれることや、P二六六八における「關外春秋」の進書表にも「天寶二年（七四三）六月十三日、少室山布衣、臣李筌上表」とあることを紹介する。そして新たに二つの資料を組上に載

せる。一つは「雲溪友議」巻上の記述である。

李筌は郎中にして、荆南節度判官と爲る。「關外春秋」十巻を集め、既に成りて、自ら之を鄙して曰く「常の文也」乃ち「黃帝陰符經」に注す……筌、後に鄧州刺史と爲る。一夕、三更に、東南隅に忽として異氣を見る……則ち知る安祿山は南陽に(於)生まれ、異人は先ず之を知れり矣。

安祿山(七〇三?―七五七)の出生を察知したというのは時期がおかしいが、荆南に勤務してから刺史になったとする点は「集仙伝」と一脈通ずる、と余嘉錫は指摘する。さて、もう一つは「郡齋讀書志」巻七(職官類)の「中台志」に関する記述である。

殷周より(起)隋唐まで(迄)、輔相の邪正之迹を纂め、皇・王・霸・乱・亡の五類に分ち、以て鑒戒と爲す。唐相は李林甫・陳希烈を以て皇道に附す。筌、上元中(七六〇―七六一)自ら表して、天寶の初め迫られて以て名を綴ると云。

李林甫(??―七五二)や陳希烈(??―七五七)を五段階評価の最上級としたことを、のちに李筌は弁明したと言うのである。その弁明が上表という形をとる以上、やはり李筌は無官ではあるまい、と余嘉錫は述べ、羅振玉の説に否定的である。

王重民(「敦煌古籍叙録」)も、余嘉錫とは別に、羅振玉説に補訂を試みている。それによれば、同時期に二人の李筌がいたそうである。「全唐文」巻三百六十一の李筌「黃帝陰符經疏序」冒頭に

少室山の達觀子こと李筌

とある一方、「全唐文」巻三百六十四は李筌「北岳恒山封安天王銘」を収め、作者の履歴については

筌、官は左羽林兵曹參軍、直翰林學士内供奉、上柱國

とする。王重民によれば、「全唐文」がこのように分けるのは誤り

だが、しかし道家であり兵法に通じ軍事関係の職を歴任した李筌と、「關外春秋」や「中台志」を著して歴史に毀譽褒貶を加えた儒家の李筌とは、別人なのだという。さらに「雲溪友議」の記載については、「新唐書」の安祿山伝にも見える張仁愷の話が原型であると指摘した上で、二人の李筌の混同が宋代すでに起こっていた証左だと断じている。

紛々たる諸説を検証したのは岑仲勉である(「跋敦煌抄本唐人作品兩種」)、「中華文史論叢」一九八一年第一輯)。それによれば、

(一)「太白陰經」の序は永泰四年(七六八?)の紀年がおかしいのみならず、上表文のスタイルを採っており、進書表と両立しにくい。

(二)「太白陰經」の進書表も序も、時代背景に照らして全くの杜撰であり、進書表が乾元二年(七五九)と序より先行するなど、信用できない。

(三)「雲溪友議」は、相対的に信憑性がある。荆南節度は至德二年(七五七)に置かれ、州や刺史の称が復活したのも同じ年だから、李筌が荆南節度判官から鄧州刺史になったという記述に矛盾しない。

(四)「神仙感遇伝」の説は、江陵つまり荆南を任地とする点で「雲溪友議」に似るが、開元年間(七一三―七四二)という時期が上述の資料群と噛み合わない。

(五)「集仙伝」が李筌を「荆南節度副使・仙州刺史」と記するのは、仙州が開元年間のほか大曆四―五年(七六九―七七〇)にも置かれており、ありえない事ではない。

(六)「新唐書・藝文志」(三)、子部道家類神仙、李筌「驪山母伝陰符玄義」(一卷)や「關外春秋」進書表、「直齋書錄解題」

の共通性を見れば、李筌が嵩山に隠棲した事実は信じるべきである。そして「閩外春秋」から、年代の一点は天宝二年（七四三）に押さえられる。「雲溪友議」の記述は、まず官職を紹介する筆記小説の構成法からすれば、必ずしも李筌が荆南節度判官のとき「閩外春秋」を書いたことを意味しない。また「中台志」執筆は、陳希烈が宰相になった天宝五年（七四六）から李林甫が死んだ天宝十一年（七五二）の間と考えられるが、この時に官職についていたとは断定できない。布衣が皇帝に上書したことは陳子昂や帥夜光の例がある（ちなみに「登科記考」は巻七末尾に帥夜光ほか四人の例を挙げる）。

（七）「太白陰経」は、巻三の黄河北道の条に「安北……今移在永濟」とあるから、乾元年間（七五八―七六〇）以降の状況を反映している。

となる。そこで、李筌は嵩山に隠棲して天宝年間に「閩外春秋」ついで「中台志」を著したのであつて、「太白陰経」を献上したとしても遅れて肅宗・代宗の世（七五六―七七九）になり、また軍事関係の地方官を歴任したことは考えられるが、それ以上のことは言えない、と岑仲勉は述べている。なお李筌が二人いたという王重民の説には、筌と荃の二字は混用されやすいことや、「閩外春秋」も「太白陰経」も軍事に関わり異質とは言えないことを挙げて、否定的である。

このように見てくると、最も信頼できるのは岑仲勉の見解であろうが、まだわからない所がある。たとえば「雲溪友議」は、先に荆南節度判官と言いつつ後に鄆州刺史と記している以上、やはり荆南節度判官のとき「閩外春秋」を書いたという文脈なのではないか。そして「北岳恒山封安天王銘」が、天宝十年（七五二）に北岳安天王を

祭った（『旧唐書』巻二十四「礼儀志」四）時のものだとすれば、その頃すでに李筌は官職についていたと考えておいて良いかも知れない。

とはいえ李筌が安史の乱と前後する時期に活躍し、少室山での研鑽を経て著作を発表し官職も得たという見通しの大筋は、肯定して良いであろう。

四 李筌のイメージ

李筌の履歴がはつきりしないのに対して、彼の神秘的なイメージは喧伝されている。そのことを詳しく見ておこう。

范攄の「雲溪友議」は、余嘉錫「四庫提要弁証」巻十七（子部小説家類）に詳しいが、およそ九世紀後半の書である。ここでは李筌について、まず「黄帝陰符経」をめぐる逸話が記される。

「閩外春秋」十巻を集め、既に成り……乃ち「黄帝陰符経」に註し、兼ねて大義を成す。《禽獸之制在氣》に至り、年を経れば慘然として解けず。忽として烏衣人の理を引きて（而）之を教うるを夢み、其の書、遂に世に（於）行なわる。僉な鬼谷・留侯復た生まるる也と謂う。

すなわち李筌にはわからない箇所があつたが、神助を得て注釈を完成させ、鬼谷子や張良の再来と呼ばれたと言う。「黄帝陰符経」については、余嘉錫「四庫提要弁証」巻十九（子部道家類）の「陰符経解」の項に詳しい。それによれば、黄帝に仮託して六朝時代に作られたものである。余嘉錫はさらに、李筌が注を付けるに際し、驪山老母から解説を受けたことにしたのではないかと述べている。この驪山老母の話は、字句は多少異なるが同じ内容の同じものが「神

仙感遇伝」や「集仙伝」に見え、李筌の「陰符経疏」にも「原序」として載っている。いま「原序」から紹介しよう。

少室山達觀子李筌、神仙之道を好み、常に名山を歴て、博く方術を采る。嵩山の虎口巖の石壁の中に至り、「陰符」を得……筌、略ぼ抄記し、誦じて口に在りと雖も、竟に其の義理を曉る能わず。秦に入るに因りて、驪山の下に至り、一老母に逢う……曰く、火生於木、禍発必克。筌、驚きて(而)之に問いて曰く、此れは是れ「黄帝陰符」上の文なり、母よ何ぞ得て(而)言うや。母曰く、吾、此の符を受け、三元六周甲子なり矣……年少よ何く従り(而)知るや。筌、首を稽げ再び拝し、具さに得る処を告ぐ……母、語り畢れば、日、已に晡れたり矣。曰く、吾に麦飯有り、相与に食を為さん。因りて袖中より一瓠を出し、筌をして(令)水を取らしむ。筌、谷中に往きて水を盛れば、其の瓠、忽ち重きこと百余斤ばかり(可)、力、制するごと能わずして便ち泉に(於)沈む。随いて覓むれど得ず、久しくして(而)却り来たれば、已に母の所在を失い、唯だ麦飯一升を留む。筌、悲泣号訴して夕べに至るも復た見ず。筌、乃ち麦飯を食して(而)帰る。漸く飢えざるを覚え、能く数日食せず亦た能く一日数食せしむる(令)に至り、氣力、自ら倍す。筌、注する所の「陰符」、並びに驪山母の説く所に依り、筌の自ら能くするに非ず。後來の同好、敬する爾。天機、妄りに伝うる無き也。

これは、しかし李筌の書いた序であるかどうかは疑わしい。話の内容容も「雲溪友議」より随分と尾緒がついている。李筌自身の吹聴ではなく、彼の神秘化が進んだ結果がこの話ではないだろうか。なお「集仙伝」や「神仙感遇伝」については李劍国「唐五代志怪传奇叙

録」(南開大学出版社、一九九三年)に詳しいが、共に杜光庭による十世紀前半の作と考えられる。

さて「雲溪友議」は、前述のように、彼が安禄山の出生を察知した話も載せている。

一夕、三更に、東南隅に忽として異氣を見る。明旦、吏を呼び、郊市に於いて如し男女を産みし者あれば、貧富を以てせず悉く取りて焉に至らしめ、十余輩を過ぐ。筌、之を視て曰く、皆な凡骨也。重ねて村落に於いて之を搜訪せしむ(令)。乃ち牧羊胡婦の一子を得、李君、容を憐めて曰く、此れ假天子也。座客、之を殺さんことを勸むれど、筌は以て不可と為し、曰く、此の胡雛は必ず国盗と為らん、古えも亦有り。然れども假を殺さば真を生むを恐る矣。則ち知る安禄山は南陽に(於)生まれ、異人は先ず之を知れり矣。又た曰く、此れ天下之事なれば、卒に去る可からず。是を以て石勒は鹿奔之兆を致し、桓玄は星光之瑞に勤む。王夷甫・宋高祖や、早に玄・勅を害し、永く太平を称えんと欲せざるに非ざるも、之を殺さんとして得ざる耳。梁武帝は、太白之変を視て(而)殿を下りて奔り、後に夷狄之主に(於)愧ず。凡そ大盗と為る者は、必ず異有り。筌、首めて之を知る。之を知れど(而)禳う可からざる也。

これは「新唐書」安禄山列伝に見える張仁愿の話が原型だと、王重民は指摘していた。

生まるるに及び、光有りて穹廬を照らし、野獸尽く鳴く。氣を望む者、其の祥を言えば、范陽節度使張仁愿、廬帳を捜さしめ(遣)、尽く之を殺さんと欲すれど、匿われて(而)免る。

もっともこちらの話では、張仁愿が自ら察知したわけではないし、見付けたのに殺害を断念したわけでもない。話のポイントは安禄山

の強運から李筌の洞察力へと変えてある。その際に、安祿山の処分を求め、張九齡とそれを拒む玄宗との有名な会話なども、ヒントを与えたであろう。ここでは「大唐新語」巻之一「匡贊」から引いておく。

張九齡……曰く、祿山、狼子野心にして（而）逆らうの相有り。

臣請う、罪に因りて之を勤し、後患を絶つを冀わん。玄宗曰く、卿よ、王夷甫の石勒を識る之意を以て、誤りて忠良を害する勿れ。

この王夷甫こと王衍が少年時代の石勒を、向者の胡雛……恐らく將に天下之患と為らんとす」と評したことは、「晋書」巻一百四の石勒載記に見える。このセリフも、李筌の話に引用されていると見ても良からう。

さて李筌の神格化を窺わせるエピソードが「広陵妖乱志」に見える。この本は、一説に羅隱の作とも言うが、李劍国「唐五代志怪傳奇叙録」の「中元伝」の項によれば、郭廷誨の作と見做すのが妥当である。いずれにせよ「雲溪友議」と同時期かやや遅れての成立と考えられよう。

〔呂〕用之、忽として曰く、后土夫人の靈仇、使いを遣わし某に就きて兵馬、並びに李筌の撰する所の「太白陰経」を借らしむ。〔高〕駢、遽かに……五彩の箋を以て「太白陰経」を写すこと十道、神座之側に（於）置く……有る人……詩に曰く……案上に誇るを休めよ「太白経」。

ここでは后土夫人がダシに使われており、その後土夫人も兵馬とあわせて借りたがるのが「太白陰経」だと言うのだから、著者たる李筌は神様も一目おく兵法家だったことになる。また高駢は文武に優れ、黄巢の乱などで手柄をたて後に反乱した人物だが、その彼も

李筌の書を愛読していたことが偲ばれる。高駢とおよそ同時代的人物が書き残したこの話は、李筌を主に描く内容ではないぶん、逆に注目すべき資料だと言えよう。

冒頭で紹介したように、李瓊や郭威が「閩外春秋」を愛読した一因は、作者李筌のこうした神秘的なイメージにもあったと思われる。ではその内容は、どんなものであろうか。

五 「閩外春秋」の梗概

「閩外春秋」は、前述のように巻一から巻二の途中まで（P二六六八）と巻四の途中から巻五の末尾まで（P二五〇一）が残っている。その梗概を紹介しよう。記述は一字分の空白や年月表示を目安にして段落を区切り、それに各巻ごとの通し番号を付けた。また出典と考えられる書名と箇所を付記した。アスタリスクは評を付すもので、そこに「詩に云わく」とあれば二つ付け、また「君子曰く」の語が無ければカッコに入れる。

〈P二六六八〉

巻第一「周秦」

①周武王十有三年春正月、武王の孟津での誓い

：「尚書」秦誓上・牧誓・武成。

②桓王六年冬、公子突の助言を聞いて鄭伯は北戎を退ける

：「左伝」隠公九年冬。

③十有六年春正月、季梁の助言を聞かず随侯は楚に敗れる

：「左伝」桓公八年夏。

④十有九年春正月、闕廉の助言を聞いて楚は鄭を退ける

：「左伝」桓公十一年春。

- ⑤ 莊王十有三年春正月、曹劌の助言を聞いて魯莊公は齊を退ける
 : 「左伝」 莊公十年春。* * *
- ⑥ 惠王十有九年夏五月、晋の荀息が虞に道を借りる
 : 「左伝」 僖公二年春。秋。
- ⑦ 廿二年冬、晋の卜偃の予言どおり、虞は滅ぼされる
 : 「左伝」 僖公五年冬。(*)
- ⑧ 定王十年夏六月、孫叔敖の督軍で晋に勝つが、楚莊王は潘党を戒める
 : 「左伝」 宣公十二年夏。*
- ⑨ 靈王二年夏六月、魏絳は晋悼公の關係者を軍令違反で斬る
 : 「左伝」 襄公二年夏。秋。* * *
- ⑩ 十有七年冬十月、斉の靈公は晋の擬兵に怯えて防衛線を退く
 : 「左伝」 襄公十八年秋。冬。
- ⑪ 敬王八年冬十有二月、伍員は呉公子光に楚を伐つ計を答える
 : 「左伝」 昭公三十年冬。
- ⑫ 初、孫子は呉王闔廬の寵姫が軍令に従わないのを斬つて名を揚げる
 : 「史記」 孫子列伝。
- ⑬ 十有四年冬十二月、呉王の弟である夫概王の好判断が続ぎ楚昭王は逃げる
 : 「左伝」 定公四年冬。
- ⑭ 顕王十有六年、孫臏の助言を聞いて田忌は趙を救い魏を破る
 : 「史記」 魏世家・孫子列伝。
- ⑮ 廿有八年、孫臏は滅竈の計をへて馬陵道で龐涓を倒す
 : 「史記」 魏世家・孫子列伝。
- ⑯ 赧王三十有一年、田單は桑穀を離間させ火牛の計で燕を齊から退ける
 : 「史記」 田單列伝。
- ⑰ 革命、周の盛衰について
 : 「尚書」 秦誓上・武成。
- ⑱ 秦昭王四十有七年秋七月、趙の趙括は書生ゆえ秦に大敗するが母は見通していた
 : 「史記」 白起列伝・廉頗列伝。* * *
- 卷二 秦漢
- ① 秦始皇帝二十有四年、王翳は始皇帝の疑いを避けた上で大軍を率い、兵士を巧みに訓練し荊を破る
 : 「史記」 秦始皇本紀・王翳列伝。
- ② 二世元年秋七月、陳涉は張耳・陳余の意見を聞かず陳王となる
 : 「漢書」 陳勝伝・張耳陳余伝。* * *
- ③ 冬十有二月、蒯通は范陽令を、廝養卒は武臣を、弁舌で救う
 : 「漢書」 蒯通伝・張耳陳余伝。
- ④ 二年秋九月、項梁の死と宋義の死および王離の死について
 : 「漢書」 項籍伝・「史記」 王翳列伝。
- ⑤ 三年春二月、酈食其の助言を聞いて沛公は陳留を得る
 : 「漢書」 酈食其伝・「史記」 酈生列伝。
- ⑥ 秋八月、張良の緩急宜しきを得た二度の助言を聞いて沛公は咸陽に入る
 : 「漢書」 高帝紀上・張良伝。
- ⑦ 革命、秦の盛衰について
 : 賈誼「過秦論」。
- ⑧ 漢元年冬十月、范增に志を見抜かれた沛公は、樊噲の弁舌などで窮地を逃れる

：「漢書」高帝紀上・樊噲伝。

⑨二年春正月、蕭何の助言を聞いて漢王は巴蜀に向かい韓信を大将にする。韓信の助言を聞いて漢王は満足する

：「漢書」蕭何伝・韓信伝。* *

⑩秋九月、韓信は陽動作戦で魏王豹を破る

：「漢書」韓信伝。

⑪三年冬十月、武安君李左車の意見を聞かず、成安君陳余と趙王歇は韓信の背水の陣に敗れる。韓信は李左車に今後の意見を求め……。

：「漢書」韓信伝。

〔尻切れとんぼで終わり、以下の記述は「閩外春秋」とは関係が無い〕

（P二五〇）

〔巻第四、前缺〕

①宣帝……、趙充国は「百聞不如一見」の語を吐いて西域に乗り込み、たびたび的確な判断で羌を破る

：「漢書」趙充国伝。

②元帝建昭二年秋七月、陳湯は中央の指示を待たずに出陣し、戦意は無いと偽っておいて支婁干を破る

：「漢書」陳湯伝。

③新室地黃三年冬十月、劉伯升〔續〕は劉聖公〔玄〕の即位に反対するが、張昂の一喝に周囲が従ってしまい、のち共倒れとなる

：「後漢書」列伝第四齊武王續。*

④革命、前漢の盛衰について

：「漢書」王莽伝の贊。

⑤更始元年春三月、光武は昆陽で王邑の大軍に包囲されるが、手勢を励まし、脱出して応援を求める。王邑は嚴尤の策を聞かず包囲にこだわり、結局は逆転される

：「後漢書」光武帝紀上。*

⑥冬十月、寇恂と呉漢は、それぞれ上司である太守を、光武に味方させる

：「後漢書」列伝第六寇恂・同第八呉漢。* *

⑦二年春正月、耿純は一族郎党の住宅を焼き払って、劣勢の光武に従う。邳彤は信都から長安への移動に反対し、それが光武の成功につながる

：「後漢書」列伝第十一邳彤・同第十一耿純。

⑧夏五月、蕭王となった光武は、銅馬を破ってから手なすける。賈復は漢中王劉嘉に勧めて帰順させる（一）

：「後漢書」光武帝紀上・列伝第七賈復。* *

⑨後漢光武皇帝建安〔建武〕三年春閏正月、鄧禹は赤眉にてこずるが、馮異や光武帝の好判断で降伏に追い込む

：「後漢書」光武帝紀上・列伝第七馮異・同第六鄧禹・同第一劉盆子。*

⑩四年夏六月、王霸は馬武に援軍を送らないことで内外の士気を高め、最終的に周建・蘇茂を破る

：「後漢書」光武帝紀上（？）・列伝第十王霸。

⑪五年冬十月、耿弇は張歩と戦うに際し、西安を攻めると揚言しつづ臨淄を攻めることで、二城を共に落とす

：「後漢書」光武帝紀上・列伝第九耿弇。

卷第五 後漢

①後漢光武皇帝建武六年十有一月、隗囂が馮異に大敗した遼因

は、王元の自立策を採らず、また王遵に諫められ光武帝の使者である来歙を許した点などにある

：「後漢書」光武帝紀下・列伝第七馮異・同第三隗囂・同第五来歙。*

②十年冬十月、寇恂は隗囂の殘党である高峻を、使者として来たその參謀を斬り捨てて好判断で降伏させる

：「後漢書」列伝第六寇恂。

③十有一年夏六月、光武帝は来歙の進言もあり、荊邯の意見を活かせない公孫述を圧倒する

：「後漢書」列伝第五来歙・同第三公孫述。*

④十有九年春正月、東海王（明帝）の好判断で、臧宮の包圍した妖賊は瓦解する

：「後漢書」光武帝紀下・列伝第八臧宮。

⑤明帝永平十有八年夏六月、耿恭は匈奴に包圍されるが、祈りが通じて水が湧く

：「後漢書」明帝紀・列伝第九耿恭。*

⑥靈帝光和六年秋八月（一）、何進は袁紹と宦官一掃を図るが、陳琳の諫めを聞かず董卓を招いて失敗する

：「三国志」董卓伝・「後漢書」列伝第五九何進。

⑦中平元年春三月、皇甫嵩は火攻めで黄巾に勝つ

：「後漢書」列伝第六十一皇甫嵩。

⑧二年冬十月、張温は董卓を嚴罰に処さず、やがて失敗するが、このとき張温を諷めた孫堅は、擬兵を使って一人で盜賊を退治したので若い頃から有名だった

：「三国志」孫堅伝。

⑨五年冬十有一月、皇甫嵩は、たびたび董卓の意見を退けて涼

州賊を破る

：「後漢書」靈帝紀・列伝第六十一皇甫嵩。

⑩獻帝初平元年春正月、曹操は董卓討伐連合軍に開戦を主張し続けるが容れられず、連合軍諸侯の運命が決まる

：「後漢書」獻帝紀・「三国志」武帝紀。*

⑪冬十有二年^{丁未}月、劉表は宗賊や袁術に苦しむが、蒯越の策に従い荊州を押さえる

：「後漢書」列伝第六十四下劉表。

⑫二年春、曹操は荀彧の策に従い、呂布を叩いて兗州を押さえる

：「後漢書」列伝第六十荀彧。

⑬三年夏、劉岱は鮑進の諫めを聞かず黄巾に急戦を仕掛けて失敗する

：「三国志」武帝紀。

⑭建安元年秋七月、曹操は荀彧の策に従い、獻帝を迎えて許を都とする

：「後漢書」列伝第六十一荀彧。

⑮三年春三月、張繡は賈詡の言を聞かず曹操に敗れ、聞いて勝つたが、曹操側でも荀彧は張繡との戦いに消極的であった。この年、曹操は呂布と戦い、郭嘉の言を聞いて勝利するが、呂布はかつて袁術から身を守るため紀靈に攻められた劉備を

助けたことがある

：「三国志」賈詡伝・荀彧伝・後漢書列伝第六十五呂布。

⑯四年春、劉曄の諫めを聞かず、孫策の計略に乗って上繯を攻め、後をつかれて曹操に投じる

：「三国志」劉曄伝。

“「閩外春秋」卷第五”

〔さらに「卅七紙」とあつて終わる〕

この残存部を見るに、進書表が「起周十有三年武王勝殷、終于大唐武德四年太宗文武聖皇帝擒竇建德。凡一千七百四十載、真偽四十九國、歴選明君良將・戰爭攻取、在師中吉者悉書其美焉。皆約史以成義、必表年以首事、褒善貶惡擬於左丘明、号曰「閩外春秋」。綜八代以爲十卷、君臣之礼・「軍旅」之事、備矣。介者得之、申胥之忠、韓・白之謀、可繼踵也。天時・地利、無敢輒書、人謀權變、秋毫必載」と紹介する内容は、大筋で肯定されよう。とはいえ些か気になることもあるので、節を改めて検討したい。

六 「閩外春秋」の性格

先に挙げた梗概で、「閩外春秋」が基ついたのであろう史書と対応部分を記しておいた。「史記」と「尚書」・「左伝」・「漢書」あるいは「後漢書」と「三国志」のように、同じ事件を扱う場合もあるし、「國語」や「戦国策」・「前漢紀」・「後漢紀」・「東觀漢紀」など有力な資料は他にもある。さらに言えば佚書を用いた可能性はもちろん否定しきれない。とはいえ、「閩外春秋」は先に記した資料の字句をかなり忠実に襲っており、この比定に大きな間違いは無かるうと、筆者は考えている。

テキストが李筌の原書の姿をどの程度とどめているか、脱落や省略・挿入・潤色は無いのかという点も気になるが、この点も筆者は樂觀的である。というのも、P二六六八・P二五〇一とも野線の中に丁寧に読みやすい字体で書かれており、また誤字や脱落部の補記なども或る程度は為されているからである。卷二の⑩の第十七行目第三・四字目「壁壁」の間に「漢書」の三十一字分が抜けているよ

うに見落しもあるが、この校正作業は概ね信頼できよう。また、その対校に用いられたのは「閩外春秋」ではなく、それが基ついた史書ではないかという疑いも無用であろう。なぜなら後述するように李筌が行なった、ときに奇妙な字句の挿入や手直しには手がつけられていないからである。

本稿で重要視したいのは、李筌が先行する史書の記述をどのような態度で扱っているかである。冒頭で述べたように、郭威が「閩外春秋」を愛読したというエピソードが中国小説史の資料となる可能性を検討するには、それが急務であろう。

さて「閩外春秋」独自の記述として、目につくのは史評である。王朝交代の節目には、「革命」として王朝の盛衰が回顧される。また個々の事件の末尾にも、しばしば「君子曰く」としてコメントが付され、そこでは「詩に云く」として「詩経」の一節を引用することも多い。進書表の「褒善貶惡擬於左丘明」とは、この「君子曰く」を指すであろう。

「革命」は先人の所説の焼き直し、「君子曰く」も新味が無い。とはいえ、特に後者は、本文との関係で注目される。たとえば巻第一⑧には

君子曰く、礼を知る也。積善に余慶あり。楚は其の後に將に興らんとする乎。

とある。楚の莊王が黄河で晋を破った時、武という字の成り立ちを述べて反省したことを、例によつて「易」から引用しつつ評したものである。ところが基づく所の「左伝」宣公十二年には

君子曰く、史佚謂う所の「乱を怙む母かれ」なる者は、是の類を謂う也。詩に曰く「乱・離ありて瘼めり矣、爰（↓筌）くにか其れ適き帰せん」乱を怙む者に（於）帰するかな（也夫）。

とあり、こちらは楚晋の戦いに乗じた鄭の国でのクーデター計画を評している。この事を「闕外春秋」は略しており、つまり「左伝」とは異なる角度から事件をみようとしているのだろう。巻第一⑤⑥は、やはり「左伝」に基づきつつ、「左伝」には無い「君子曰く」を新たに設けており、これも同様に理解できる。

ところで莊王が黄河で晋を破つたのは、彼が鳴かず飛ばずの時期を経て鼎の軽重を問うたより後のことである。孫の靈王は諸侯を会し、周に鼎を求めたが、「積善余慶」とはそのことだろうか。しかし靈王が政変で餓死の憂きめを見たり、弟の平王が女に溺れて国を誤つたことは、「史記」楚世家が「太史公曰く」として批判する所である。「闕外春秋」の史評が妥当なものとは思えない。

それはさておき、「君子曰く」の挿入には別の狙いもあるかも知れない。それは權威付け或いは信憑性の獲得である。というのも、「闕外春秋」はしばしば実録を書き写したように装うからである。たとえば巻第一⑩は

秦昭王四十有七年七月、王師伐趙之長平也。

と始まり、巻第二①は

秦始皇帝二十有四年之伐荊也、王師敗績、帝患之。

と始まり、巻第二④は

〔二世〕二年秋九月、楚人罪伐我于定陶也、王師敗績。

と始まっており、いずれも「王師」や「我」という言葉が使われている。しかし、だからといって秦の年代記を参照したわけではあるまい。「史記」六国年表の序に「独だ『秦記』有るも、又た日月を載せず、其の文は略ぼ具わらず」とあり、六国年表の内容を見ても窺えるように、それは詳細なものではなからう。そしてその「秦記」も早くに失われて、「漢書」芸文志にすら著録されていない。

「闕外春秋」では史評が春秋時代以降の記述にも類纂に付されるが、それは全て「君子曰く」であって、たとえば「達觀子曰く」ではない。勿論この「君子曰く」は、李筌以外の手になるとは考えにくく、つまり「左伝」の模倣に過ぎない。「王師」や「我」という表現は「史記」にもままた顔を出し、そちらは原資料に由来するかも知れないが、「闕外春秋」の場合は、「史記」の模倣に過ぎないであろう。

ところで、こうした形で原資料に手を加えることは、本文の性質にも影響を与えるように思われる。そこで「闕外春秋」本文と先行史書の比較を試みよう。巻四⑥から、呉漢が彭龍を説得して光武帝に投ずるくだりを適宜改行しつつ挙げると、

時漁陽以承檄、欲發兵應邯鄲、唯吳漢潔聞光武長者、獨欲歸心、乃說太守彭龍曰

「漁陽突騎、天下所聞、

長戟勁弩、無出其右、乘時不用、見機不作、悔無日矣、

蓋舉精甲、南附劉公擊王郎、此諸侯之業也、幸無後時」

龍以爲然、患部將不從。漢思以譖衆、計未定出。諸途忽遇行者、

廣衣博帶、侃侃然似儒生。

漢因言曰「夫伐國不問仁人、戰陣不訪儒士、成功者未之有也」

乃召儒生入、爲具食、問以所聞。生曰

「漢失其鹿、能者逐之、今雖滅一莽而十莽復生……子無元九慮也。

臣聞以德和人、不聞以亂理亂。今赤眉阻兵而安忍、更始貪弱而

寡謀、王郎詐多而信少、此皆成擒虜耳、不足以從事也。夫邪正

由人、吉凶是命、當須審安、危擇去就。

〔易〕曰「繫于金柅」所結惟固也。

竊謂天下之主、莫若劉文叔耳。寬仁愛下、握髮揮洗、交同布衣。

攻城略地、秋毫不取、以此毒天下而人從之、可謂真主也」
漢大悅、遂詐爲光武書、檄漁陽、令儒生齋詣龍、令具以詞說之、
漢隨後復入、龍然之、遂大發兵、與漢會光武、擊王郎而平之。
となる。これが「後漢書」吳漢列伝の場合、

會王郎起、北州擾惑、漢素聞光武長者、獨欲歸心、乃說太守彭
龍曰

「漁陽上谷突騎、天下所聞也、

君何不合一郡精銳、附劉公擊邯鄲、此一時之功也」

龍以爲然、而官屬皆欲附王郎、龍不能奪。漢乃辭出、止外亭、
念所以譎衆、未知所出。望見道中有一人、似儒生者。

漢使人召之、爲具食、問以所聞。生因言

「劉公所過、爲郡縣所歸、邯鄲舉尊號者、實非劉氏」

漢大喜、即詐爲光武書、移檄漁陽、使生齋以詣龍、令具以所聞
說之、漢復隨後入、龍甚然之、於是遣漢將兵、與上谷諸將并軍
而南、所至擊斬王郎將帥、及光武於廣阿……。

とあるのみだから、字数の増加は明らかである。それは主に人物の
発言に手を加える形で為されており、歴史をひもといたり名言を引
用したりと、熱弁をふるっている。登場人物の口を借りて李筌が語
っているわけで、評における「君子曰く」と同じ性質と言えよう。
のみならず、吳漢が儒者を見かけた時の「夫伐國不問仁人……」と
いう発言は全くの創作で、人物の心理解釈に踏み込んだ小説的描写
となっている。そのうえ、儒者の弁舌は「後漢書」の伝える史実と
は異なる文脈になっている。つまり「後漢書」では、吳漢は儒者か
ら「王郎は皇帝の子孫ではない」という情報を得たのに対し、「閩
外春秋」では「光武に帰すべし」という意見に勇気づけられたかの
ような展開であって、どうやら「述而不作」（論語）といった意

識は無さそうである。

より明らかな史実の改変は、たとえば卷四〇に見られる。まず賈
復が劉嘉に自立を説く箇所を引用しよう。

時賈復說漢中王劉嘉令歸光武曰「臣聞、圖堯舜之事而不能至者
湯武是也、圖湯武之事而不能至者桓文是也、圖桓文之事不能至
者六國是也、定六國之規而不能守者亡國是也。今漢室中興、大
王以親戚爲藩輔、天下未定而安守所保、得無不可保乎」
嘉然之、遂歸光武。

「後漢書」賈復列伝には

〔賈復〕說嘉曰「臣聞、圖堯舜之事而不能至者湯武是也、圖湯
武之事而不能至者桓文是也、圖桓文之事而不能至者六國是也、
定六國之規、欲安守之、而不能至者亡國是也。今漢室中興、
大王以親戚爲藩輔、天下未定而安守所保、所保得無不可保乎」
嘉曰「卿言大、非吾任也。大司馬劉公在河北、必能相施、第持
我書往」復遂辭嘉。

とあって、賈復の発言への手は加わっていないに等しいが、劉嘉の
反応が全く違う。「後漢書」では、劉嘉は光武への推薦状を渡して
賈復を去らせるが、「閩外春秋」では自ら光武に投するのである。

この違いの理由は、卷四〇の残る部分を見れば察しがつく。それ
は更始二年（二四）夏五月に、光武が降伏させた銅馬軍の陣營を単
独で視察して、心服させたという記述で始まる。その後引用した
部分が続き、最後に「君子曰、柔能勝剛、信能懷疑、銅馬懷光武之
信而得其用也。」「詩」云、惠而好我、攜手同歸」という評論で結ば
れている。ここで光武が銅馬軍を心服させた部分は、基本的に「後
漢書」光武帝紀の記述を襲っており、また評論の内容もそれに対応
するものである。すると劉嘉が光武に投するというのも、柔能く

剛に勝つ」という道家的評論の方向に沿わせる為の操作であると言えよう。しかし劉嘉が光武に帰順するのは、「後漢書」劉嘉列伝によれば建武三年（二七）のことだし、賈復とも関係が無い。つまり思想表出の為には、李筌は史実の改竄も辞さないのである。

史実からの逸脱という意味で、興味深いのは何進が宦官を退治しようとして董卓を呼び寄せる巻五〇の記述、特にその前半であらう。靈帝光和六年秋八月、朝綱失緒、政在宦官。尚書何進謀於袁紹

曰

「昔趙鞅興晉陽之甲、誅君側之惡。今闞豎弄權、可為蔓草也、蓋萌而難之」

太后聞而不從。進度不能制、欲召方鎮董卓之屬兵臨京師、脅而誅之。

引用部が基づくのは、「三国志」董卓伝の以下の記述だと思われる。

靈帝崩、少帝即位。大將軍何進與司隸校尉袁紹謀誅諸宦官、

太后不從。進乃召卓使將兵詣京師、并密令上書曰

「……昔趙鞅興晉陽之甲、以逐君側之惡……」欲以脅迫太后。

両者を比較すると、語順を換え、内容も変えていることがわかる。たとえば趙簡子の故事を引いて、「三国志」では何進の命をうけた董卓が太后に上書するのだが、「闞外春秋」では何進が袁紹に決起を呼び掛けている。

ここで冒頭に光和六年（一八三）と紀年されるのは、正しくは中平六年（一八九）である。同じ六年だから、単なる誤記と考えれば良さそうだが、それにしても⑦以下に中平年間の記述が続くのが解せない。しかも⑤は明帝永平十八年（七五）の記述であり、それから⑥までは随分と時間が隔たっている。何進の失敗と董卓の台頭を、後漢末の混乱の序章として位置付けるべく、李筌は敢えて光和六年

と書いたのではなからうか。

以上のような、あからさまな史実からの逸脱はもちろん特殊な例である。しかし抜粹に際しての字句の改変は、さほど抵抗なく「闞外春秋」において行なわれている。李筌の態度は歴史家のものというより、思想家ないしは小説家のそれと見做したほうが良いかもしれない。後世の書誌が「闞外春秋」を子部に置くことが多いのは、その意味でもうべなえる。

七 「闞外春秋」の読者

ここで冒頭に紹介したエピソードに戻りたい。郭威が「闞外春秋」を愛読したことの意味について、この本の性格を踏まえて考えたいのである。

郭威が「闞外春秋」を知る直接のきっかけは、李瓊にあった。そこで「宋史」巻二百六十一の彼の列伝を見ると

周祖と（与）瓊、情好尤も密なり。嘗て瓊を過ぎり、其の危坐して書を読むを見る。因りて「読む所は何の書か」と問う。瓊曰く、此れ「闞外春秋」なり、所謂正を以て国を守り、奇を以て兵を用い、存亡治乱を較べ、賢愚成敗を記すは、皆此に在る也」周祖之を読ましめ（令）、瓊に謂いて曰く「兄よ当に我に教うべし」是れ自り周祖、出入するに常に袖して以て自ら随え、暇に遇えば輒ち読み、毎に瓊と問難し、瓊を謂いて師と為す。と詳しい。ではその李瓊が「闞外春秋」を読むきっかけはと言えば、明言されないが、

祖は伝正、涿州刺史なり。父は英、涿州従事なり。瓊、幼くして学を好み、史伝を涉獵す。

とあり、ひとまず彼が勉強家・読書家であったことに帰せるであろう。そして郭威にしても、家庭の事情で李瓊ほど条件に恵まれなかったものの、向学心もあれば理解力も高かったようである。『旧五代史』には

帝、性は聡敏にして、筆劄を喜ぶ。軍旅に従うに及び、多く簿書を閲し、軍志戎政、深く肯綮を窮むれば、人皆な其の敏に服す。とあり、『新五代史』には

威、書算に通ずるを以て補われて軍吏と爲る。

とあるから、いわゆる学問ではなく実務能力に長けていたのである。なお栗原益男『乱世の皇帝——後周』の世宗とその時代（桃源社、一九七九年）は、「おそらく郭威は叔母韓氏の手で育てられた少年のころから読み書き、計算は教えられていたのだろう」と推測している（三二二頁）。

ところで郭威と李瓊の関係は『宋史』の李瓊列伝に、こう説明される。

策を杖つき太原に詣でて唐莊宗に依らんとし、属たま勇士を募れば、即ち応募し、周祖等十人と（与）約して兄弟と爲る。一日、会して飲むに、瓊、周祖を熟視し、常人に非ざるを知る。因りて酒を挙げて祝して曰く、「凡そ我ら十人、龍蛇混合すれど、異日、富貴たらば相忘るる無かれ、苟も此の言に渝われれば、神、之に罰を降さん」皆な臂を刺し血を出して誓いを爲す。

つまり後唐の莊宗に仕える下級軍人として、義兄弟の契りを交わした仲だったのである。すると彼らは当時において、『水滸伝』の豪傑たちのような存在だったことになる。李瓊の若い頃についてこれ以上の記録は無いようだが、郭威の場合は以前、李繼韜に仕えていた頃は、こんな様子であった。『旧五代史』のみ引く。

帝、時に年は十八、吏を壺関に避け、故人の常氏に依る。遂に往きて応募す。帝、氣を負い剛を用い、闘を好み力を多とす。繼韜、之を奇とし、或いは法を踰え禁を犯すも、亦た多く假借す焉。嘗て上党の市に遊ぶ。市屠の壮健なる有り、衆の畏れ憚る所なり。帝、氣を以て之を凌ぎ、酔いに困りて屠に命じて肉を割かせ、小さか不如意なれば、之を叱る。屠者、怒り、坦腹して帝に謂いて曰く、「爾よ敢えて我を刺すや否や」帝、即ち其の腹を刺し、市の人、之を執らえ吏に属す。繼韜、惜しみて（而）之を逸つ。

お尋ね者となって他郷の知人に身を寄せ、李繼韜に仕えてからも喧嘩や違法行為は日常茶飯事で、ついには肉の切り方に因縁をつけて肉屋を殺してしまったが、李繼韜は逃がしてくれたと言う。喧嘩で肉屋を殺すと言えば魯智深の鎮関西殺しを想起させること、小川環樹『新五代史の文体の特色』（『中国文学報』第十八冊、一九六三年）の注⑤が既に指摘している。

郭威と『水滸伝』の縁は他にもあって、『五代史平話』における彼は李繼韜に投ずる以前、宝剣を買おうとして口論になり相手を殺したとされる。こちらは楊志が宝刀を売ろうとして殺人に及んだ話に一脈通ずることが、龍潜庵『尋常巷陌——穿梭宋元話本之間』（江苏古籍出版社・中華書局（香港）、一九九二年）で検討されている。さらに言えば、郭威の首には雀の形の黒子があったが（『宋史』卷二百五十五張永徳列伝）、『五代史平話』では刺青とされ、前者は楊志や劉唐、後者は史進や魯智深らを彷彿とさせる。

郭威のような存在があつて、そこから『水滸伝』の豪傑たちが生まれたと言うほうが正確なのだろうが、ともあれそうした人々が『閩外春秋』の読者であつたことは興味深い。彼らはけして呉用の

ような村学究タイプではないからである。

しかし考えてみれば、読書人ばかりが歴史書の読者ではない。軍人もまた歴史書に親しんだ。たとえば梁章鉅「退庵隨筆」卷十三「知兵」の「紀文達師、嘗て言えり」に始まる記述は、以下のように述べている（『筆記小説大観』本）。

按ずるに古来の名将、実に多く「左氏伝」に精通する者あり。「江表伝」稱す、関公は「左氏伝」を好み、諷誦すれば略ぼ能く口の上ると。權徳輿、「渾城神道碑」を作り、雅に「左氏春秋」を好むと謂う。「宋史」狄青伝に云う、范仲淹は「左氏春秋」を以て之に授けて曰く、將の古今を知らざるは、匹夫の勇なる耳（原注：范の伝に云う、此に熟せば以て大事を断ず可し）青は節を折り書を読み、秦漢以来の將帥の兵法に通ずと。儒林の何涉伝に、涉は軍中に在りても亦た常に諸將の爲に「左氏春秋」を講じ、狄青之徒、皆な経を横たえ以て聴くとあり。岳忠武伝に云う、家貧しけれど学に力め、尤も「左氏春秋」を好むと。然らば則ち「左伝」は誠に兵法に（於）通ず可く、ただ須く平時に講習し、而して復た能く其の意を神妙すべき耳。これは「四庫提要」（子部兵家類存目）が「左氏兵略」の項に「左氏」の兵法、五代に至り已に用いる可からず」と記すのを駁したもので、三国の関羽・中唐の渾城・北宋の狄青・南宋の岳飛といった名将が「左伝」の読者だったことを例証している。とくに狄青や岳飛については、郭威が「關外春秋」を学んだのと同じく、それに親しんだことが後の大成につながったという文脈である。

彼らの読書は、耳に負うところも大きかったと思われる。「退庵隨筆」も挙例するように、「宋史」卷四百三十二によれば狄青は本を傍らに何渉の講義を聴いたのであり、同じく卷二百九十で范仲淹

が「之に授く」と言うのも講授の意味であろう。郭威の場合も「旧五代史」に「之に授く」とあり、「宋史」には「之を讀ましむ（令）」と見えるから、李瓊のレクチャーに助けられた面は否めない。

また、彼らが全文を読んだとは限るまい。「左伝」を読んだと言つても、少なくとも功成り名遂げるまでは、春秋の大義よりも兵法を学びたかった筈であり、そのためには隅から隅まで読む必要も無かるう。テキストが既に簡略化されていた場合もあったのではないか。現に「關外春秋」は諸書の抜粹である。

いま想定した二点は、「資治通鑑」と軍人の關係を述べた元好問の証言とも符合する。彼の「陸氏通鑑詳節」序（『元通山先生集』卷第三十六）は、「資治通鑑」のダイジェスト版に寄せた序文であり、金文京「白仁甫の文学」（『中国文学報』第二十六冊、一九七六年）以来しばしば論じられるものだが、そこには

中州の文明は百年……而して「通鑑」は則ち江左之勝に如く能わざる也。近歳、此の学頗る河朔に行なわれ、武臣・宿將も講説もて記誦し、日課と為す者有り。

と記される。金も南宋ほどではないが、「資治通鑑」の研究が行なわれ、職業軍人や経験豊かな武將たちも講義を聴いて暗唱に励んでいると言っているのである。さらに、卷帙既に多く、伝写に（於）艱し「云々と記すから、そういう原因も含めて、彼らが用いたテキストも「資治通鑑」の完本ではなかっただろう。

この「陸氏通鑑詳節」は、通行する汲古閣本「陸狀元通鑑」では全百二十卷から成り、うち卷二十一以降が「資治通鑑」のダイジェストだから、「資治通鑑」全二百九十四卷を約三分の一に圧縮した勘定になる。元好問の序は、「陸氏詳節」を取り、且つ「外記」及び諸儒の精義を以て之に附益す」とも記すが、「外記」は「外紀」

のことで、劉恕「通鑑外紀」を抜粋した卷十九〜二十に相当すると見られる。また「諸儒の精義」とは本文のあちこちに新たに挿入された学者たちの史評を指すであろう。

ちなみに元好問は「集諸家通鑑節要序」（『元遺山先生集』卷第三十六）なる序を別に書いているが、そこに記す「増入」された内容を「陸状元通鑑」の卷一〜十八などに照らせば、両者に大差は無かったようである。そして、この序では、「増入」の目的を「又た皆な科挙家の之に附益する者」と述べており、受験参考書の役割を果たしていたことがわかる。とはいえ、のちに「日知録」も「司馬溫公の『通鑑』は、『左氏』を承けて（而）作る。其の中、載する所の兵法、甚だ詳し」と評するように（卷二十六「史記」・「通鑑」兵事）、この系統の史書を軍人が学んでも不思議は無い。

以上のことから軍人が、人の教えも乞いながら、史書を部分的にでも学ぶのは、そんなに珍しいケースでは無かったことが窺える。郭威が「閩外春秋」を愛読したというのは、そうした状況を象徴するエピソードであると言えよう。

八 講史の享受者

中国小説史において、平話と総称される作品群は重要である。宋元の成立と考えられるこれらは、唐五代の変文類から明清の旧白話小説に至る流れの中間に位置付けられる。しかしその性格や背景について、研究者の見方は必ずしも統一されていらない。これは平話だけの問題にとどまらず、その前後の作品を考える上でも一つの足枷と成りかねない。

平話に対する筆者の見方は、およそ以下のようなものである。す

なわち平話の中には、史書から取材する部分が多いものと少ないものがある。一方で当時の話芸には、史書を敷衍する講史と史実にこだわらない「小説」とがあったけれど、講史は南宋のころ、次第に「小説」の手法を取り込んだため、両者の境界は曖昧になっていった。そこで平話のうち、史書利用部分の多いものほど講史本来の姿を反映していると考えるのである。ただし平話は、講史の台本や筆録ではなく、その語り口などを模倣した編集の産物であろう。

この見地に立てば、講史の面影を最も伝えるのは「五代史平話」である。これは、「資治通鑑綱目」など史書の記述をやや口語的に改めつつ再構成した部分が、全体の約四分の三を占める。残る部分は、のちに皇帝となる登場人物の雌伏時代を描いた、いわゆる「発跡変泰」物語が多くを占め、また戦闘描写を史書より詳しくしている点も目につく（以上については「五代史平話」のゆくえ―講史の運命）、『中国文学報』第五十六冊、一九九八年参照。

ところで、沢田瑞穂「発跡変泰」（『宋明清小説叢考』研文出版、一九八二年）によるなら、こうした「発跡変泰」物語は主に将校・軍兵のために作られたもので、その背景は、南宋臨安の瓦舎に求められる。瓦舎とは盛り場のことで、講史や「小説」といった話芸も多くそこで行なわれていたのだが、臨安の城外に設けられた瓦舎は楊存中という將軍が兵士慰安のために設けたものだった。

ちなみに楊存中が瓦舎を設けた史実は、金文京「戲考―中国における芸能と軍隊」（『未名』第八号、一九八九年）においては芸能一般と軍隊の密接な関係を示す一例として、また小松謙「武人のための文学―楊家將物語考―」（『阿頼耶順宏・伊原沢岡両先生退休記念論集アジアの歴史と文化』汲古書院、一九九七年）においては楊家將の物語が人口に膾炙した一つの原因として、取り上げられている。

なお瓦舎については康保成「瓦舎」、勾欄「新解」(『文学遺産』一九九九年第五期)参照。

さて「五代史平話」が史書を基礎としつつ、「発跡変奏」物語や戦闘描写にも力を入れているのは、講史が「小説」の手法を、採用し始めたころの姿を表すものだと言われている。逆に言えばそれ以前の講史は、史書の要所を敷衍する内容だったと推定するのである。何涉が狄青ら將軍たちに「左伝」を講じたという例を前節で見たが、おそらく講史はそうした場が芸術化したものであろう。ただし「五代史平話」から「発跡変奏」物語や戦闘描写を取り除いても、残りが全て史書本文の敷衍ではない。各巻の巻頭や巻末などに、しばしば史評や詠史詩が見られる。その史評は基づく史書の史評に由来する部分もあるが(前掲の氏岡論文参照)、詠史詩はもちろん入っていない。

ここで想起したいのは、「關外春秋」が「君子曰く」として史評を付し、多く「詩経」の引用で締めくくることである。前述のように「左伝」の模倣だが、これらの通俗化した姿が、平話に挿入される詠史詩ではないだろうか。史評が減り詠史詩が増えるという比率の逆転も、同様に通俗化の表れと言えよう。一方では「陸氏通鑑詳節」のように、「諸儒の精義」の増補に力を入れて、意欲ある軍人や科擧受験生に資する方向もまた存在した。武擧でも論・策が要求されたから(中嶋敏編『宋史選擧志訳注』(二)「東洋文庫、一九九六年」、史評を参照したい軍人は存在した筈である)。

それはさておき、平話がなぜ詠史詩を含むのかについては、張政娘「講史与詠史詩」(『国立中央研究院歴史語言研究所集刊』十、一九四八年)が説く詠史詩注からの発展説が有名である。これも魅力的な仮説だが(岡村真寿美「五代史平話」の成立―「講史書」と

の関係)『中国文学論集』第二十七号、一九九八年)、最も有力な証拠となる筈の「秦併六国平話」において、頻出する詠史詩の前後の記述は注を基礎とせず、逆に史書の記述に詠史詩を挿入した疑いが濃い(氏岡真士「平話の基ついた史書―平話の作り手についての試論」、『日本中国学会報』第四十九集、一九九七年)。また、いわゆる交文に多く見られる説唱体を根拠に、詠史詩はその痕跡と考えるのも、成化説唱詞話が発見された現在においては、まず平話でなくそちらとの関連を考えるべきであろう。一昔前の大家の所説をいくら紡ぎあわせても、それだけでは説得力に乏しい。

もとより筆者の説くところも今後の検証を待たねばならないが、ともあれ本稿で述べた「關外春秋」をめぐる諸問題を視野に入れることで、中国小説史における講史や平話の問題について、より穏当な解釈が導けるものと考ええる。識者の叱正を乞うべく、急ぎ私見を公開する次第である。

“Kun-wai Chun-kiu (閩外春秋)”
and Jiang-shi (講史)

UJIOKA Masashi

“Kun-wai Chun-kiu” is a chronicle of wars written by Li Quan (李筌) in the eighth century. It remains no more perfectly now, but its Vol. I, II, IV and V is preserved in the Dun-huang (敦煌) manuscripts.

The author analyzes the contents and the readers of “Kun-wai Chun-kiu”, then points out the relevance to Jiang-shi, a kind of storytelling in the Song (宋) dynasty.